

心理学研究室報

平成28年度 専修大学人間科学部心理学科 大学院文学研究科心理学専攻

I. 専修大学心理学研究室

人間科学部心理学科報告（吉田弘道学科長）

今年の4月に1年生が91人入学してきました。この1年生を迎えて、恒例となっているフレッシュマンキャンプが、4月16日、17日の1泊2日の日程で、伊勢原セミナーハウスにて開催されました。実行委員会のメンバーである2～4年生の主導のもと、新入生同士、あるいは教員との交流を深める機会となりました。大学院では修士課程1年生が15人入学し、修士2年生9人、博士後期課程8人で、大学院生計32人という数になりました。それぞれの院生は、専門とする領域の研究を進めています。臨床心理士を志望している院生は、実習を含めた教育・訓練を受けています。

これらの学生に対して、専任教員14人、助教1人、実習助手2人という教員組織で、力を合わせて学科を発展させるべく、教育と研究を行っています。このうち、石金浩史准教授は長期在外研究員として4月から1年間の予定でアメリカに留学されています。

平成26年の9月に学部長になられた山上精次教授は、平成28年3月の学部長選挙で再選されました。平成28年9月から2期目に入っておいでで、これまでの長い間の教育、研究活動、そして学務関係のご経験を生かしながら、人間科学部をリードするお役目を担って忙しく活動されています。

さて、平成27年9月に法案が成立した心理職の国家資格「公認心理師」ですが、平成30年度から対応したカリキュラムで教育を行う準備をすでに開始しなければならない時期なのですが、まだカリキュラムが確定していません。ただ、学科内に設けた「公認心理士対策検討委員会」を中心に、情報を集めながら準備をしているところです。

ところで、文学部が今年開設50周年を迎え、50周年記念行事が行われました。私たちの心理学科は、昭和41年（1966年）文学部人文学科心理学コースとしてスタートしましたので、心理学科もこの記念行事に参加しました。5月28日の土曜日の午後、サテライトを使って、講演会を開催しました。テーマは、「こころとの付き合い方：地域に根ざす相談室として」であり、「引きこもりについて考える：実態とその取り組み」（乾吉佑名誉教授）、「心理教育相談室における高次脳機能障害者支援」（岡村陽子教授）、「心理教育相談室におけるうつ認知行動療法」（国里愛彦准教授）、「地域に根ざす子育て：『親と子の集まり 多摩っ子』の13年」（吉田）の講演内容でした。参加者は少なかったのですが、関心のある方々が集まりました。

文学研究科心理学専攻報告（国里愛彦文学研究科委員心理学専攻主幹）

専修大学大学院文学研究科心理学専攻は、修士課程と博士後期課程からなり、心理学研究領域における研究者、臨床心理士など心理臨床における実践家の養成を行っています。本年度、文学研究科心理学専攻の修士課程1年次には15名、2年次には9名が在籍し、博士課程1年次には3名、4年次には2名、5年次には1名、6年次には2名が在籍していました。本年度は、修士課程のA名が修士論文を提出し、口述試験を全員無事合格しました。博士課程では、B研究室のCさんが博士号を授与されました。基礎心理学系の大学院生は、調査・実験などの研究活動に取り組み、着実に研究成果を積み上げていました。一方、臨床心理学系の大学院生は、講義・実習などを通して実践的な知の習得に取り組みと同時に、調査・実験にも取り組んでいました。研究成果を国内学会や国際会議にて、発表する大学院生も増えてきており、学会などで本専攻の大学院生の発表を見かける機会も増えてきました。本年度も、修士論文中間報告会、院生研究会、カンファレンス、自主的な研究会などにおいて、学年を超えて院生同士の交流が行われていました。次年度も、大学院生の活発な研究・臨床活動が継続できるように、本専攻全体でサポートしていく予定です。

II. 心理学教員研究室報告

14名の専任教員で構成されています。今年度は石金浩史教授が特別研究員でした。以下は各教員研究室年度報告です。

藤岡研究室（心理査定学）

公認心理師法が、昨年度9月9日に成立しました。それに伴い「公認心理師カリキュラム等検討会」が設置され、事務局として「公認心理師制度推進室」（厚生労働省内に）が置かれました。平成29年3月には、公認心理師カリキュラムが発表される予定ですが、現時点では、いまだに具体案の姿が見えません。カリキュラムが発表されれば、それに沿った専修大学のカリキュラム検討・具体化が急務となりますが、全心理学科スタッフの結集が求められていると考えております。

平成28年度も「心理査定学」全般に渡って学ぶことを目標に、各種の心理検査の体験、解釈、論文の講読などを行いました。公認心理師カリキュラムにおいて、心理査定（心理アセスメント）が重要視されていることも踏まえて、本年は、特に心理検査を中心とした事例研究について取り上げ、学生が臨床場面での心理検査の利用の仕方や心理アセスメントの仕方について、具体的にイメージできるように試みました。本年の研究室の構成は、学部生のみで、3年次生6名、4年次生6名の12名で、卒業論文、プレ卒論の作成に、真摯に取り組んできました。

今年のゼミ合宿は、9月13日～15日（2泊3日）、伊東温泉「山喜旅館」において実施しました。参加者は、学部学生10名、大学院生1名、大学院修了生1名の12名で、学生同士の懇親を深めました。例年により、心理査定学に関する専門

的知識だけでなく、さらなる幅広い臨床心理学に関する知識や関心を深めるために、「社会的ひきこもり—終わらない思春期—」(斉藤環 PHP 新書)を読みました。

諸活動

金城辰夫監修 山上精次・藤岡新治・下斗米淳編 (2016): 図説現代心理学入門 四訂版 (培風館)

日本ロールシャッハ学会 監事

国里研究室 (臨床心理学)

私たちの研究室は、不安や抑うつ発症・維持メカニズムや認知行動療法の作用メカニズムについて、行動・生理実験や計算論的アプローチを用いて明らかにすることを目的としています。平成28年度の人員構成は、教員1名、大学院生6名(修士1年:3名, 修士2年:1名, 博士1年2名)、学部生14名(3年:6名, 4年:8名)でした。

学部4年生は、昨年度学んだことを活かしながら、それぞれの関心に合わせた調査や実験を行いました。今年も、新たな質問紙の作成研究や PsychoPy による実験課題を用いた研究が多く、オリジナリティにあふれた卒業研究になりました。学部3年生は、臨床心理学の研究法と認知行動療法に関する輪読を通して、専門的な知識を身につけるとともに、PsychoPy を用いた実験課題の作成や R を用いたデータハンドリングも身につけながら、卒業研究の準備をしています。

大学院生は、臨床心理学に関する専門的な知識を学ぶとともに、修士・博士論文の研究を行い、全員が日本認知・行動療法学会においてポスター発表を行いました。また、日本認知・行動療法学会において、柚取さんが研究室で初めてシンポジウムの演者を経験しました。坂本さんと柚取さんは、The 46th annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies をはじめとする国際会議で発表しました。金子さんと土谷さんも The 31st International Congress of Psychology にて、初めての国際会議発表を経験しました。また、坂本さんと柚取さんが日本学術振興会特別研究員 DC1 に採用されたことも、本研究室としては嬉しいニュースになりました。今年も認知行動療法の勉強会を実施したり、ピンカーの「心の仕組み」や松浦の「Stan と R でベイズ統計モデリング」の読書会も行ったりし、臨床と研究の研鑽を積んでいます。

今年度のゼミ合宿は、伊東で実施し、修士・学部ともに全員が参加しました。今年も、ワールドカフェ方式での発表を取り入れることで、学生同士のディスカッションが盛り上がりしました。普段とは違う場所で発表やディスカッションを行い、着実に卒業論文や修士論文に向けた準備ができていたように思います。本研究室は、今年で4年目となります。今年、多チャンネル脳波計の導入も行い、現在、その設定や予備実験を行っています。次年度には、脳波での実験や解析についてもより深めていく予定になります。

諸活動

Yoshimura, S., Okamoto, Y., Matsunaga, M., Onoda, K.,

Okada, G., Kunisato, Y., Yoshino, A., Ueda, K., Suzuki, S., & Yamawaki, S. (in press). Cognitive behavioral therapy changes functional connectivity between medial prefrontal and anterior cingulate cortices, *Journal of Affective Disorders*.

Takagaki, K., Okamoto, Y., Jinnin, R., Mori, A., Nishiyama, Y., Yamamura, T., Yokoyama, S., Shiota, S., Okamoto, Y., Miyake, Y., Ogata, A., Kunisato, Y., Shimoda, H., Kawakami, N., Furukawa, A. T., & Yamawaki. (2016). Behavioral activation for late adolescents with subthreshold depression: a randomized controlled trial. *European Child & Adolescent Psychiatry*, 25 (11), 1171-1182.

Hasegawa, A., Nishimura, H., Matsuda, Y., Kunisato, Y., Morimoto, H., & Adachi, M. (2016). Is trait rumination associated with the ability to generate effective problem solving strategies? Utilizing two versions of the Means-Ends Problem-Solving Test. *Journal of Rational-Emotive & Cognitive-Behavior Therapy*, 34, 14-30.

伊藤理紗・兼子唯・巢山晴菜・佐藤秀樹・横山仁史・国里愛彦・鈴木伸一 (2016). 単一恐怖症状の高い大学生における、エクスポージャー中の安全確保行動の効果. *行動療法研究*, 42 (2), 237-246.

柚取恵太・坂本次郎・時田棕子・鈴木彩夏・国里愛彦 (2016). 診断精度研究の系統的レビューとメタアナリシス, 専修人間科学論集 心理学篇, 6 (1), 41-58.

国里愛彦 (2016). 「2.4 不適応の問題」と「2.5 心理的援助(心理的介入)」『図説 現代心理学入門 [四訂版]』金城辰夫監修, 山上精次・藤岡新治・下斗米淳 (共編) 培風館 pp.56-65. (2016/3/30)

国里愛彦 (2016). 脳画像検査『公認心理師必携 精神医療・臨床心理の知識と技法』下山晴彦・中嶋義文 (編) 医学書院 pp.197-198. (2016/9/1)

Sakamoto, J., Somatori, K., & Kunisato, Y. (2016). Healthy university students' day-to-day pain variability, depression, and pain-catastrophising: using the experience sampling method and Bayesian linear model. Poster session presented at the 46th annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies, September 1, Stockholm, Sweden.

Somatori, K., Shimotomai, A., & Kunisato, Y. (2016). Does the Propositional Approach Co-exist Rescorla-Wagner model: the prediction of extinction form acquisition. The 46th annual Congress of the European Association for Behavioural and Cognitive Therapies, September 1, Stockholm, Sweden.

Sakamoto, J., Okubo, M., & Kunisato, Y. (2016). How depression affects future pain and decision-making: Computational approach with Bayesian cognitive modeling. Poster session presented at the 8th World Congress of Behavioural and Cognitive Therapies, June 25, Melbourne, VIC, Australia.

Hasegawa, A., & Kunisato, Y., Morimoto, H., Nishimura, H., Matsuda, Y. (2016) How do depression, rumination and social problem solving interact with each other? A three-wave longitudinal study. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, July 26, Yokohama, Japan.

Tsuchiya, M. & Kunisato, Y. (2016). Developing a new emotional-switching Stroop task. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, July 25, Yokohama, Japan.

Somatori, K., Shimotomai, A., & Kunisato, Y. (2016). How people estimate their confidence: Bayesian model comparison leads to a more efficient model. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, July 27, Yokohama, Japan.

Sakamoto, J., Okubo, M., & Kunisato, Y. (2016). Depression and future pain estimation: Investigating judgment process using Bayesian cognitive models. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, July 27, Yokohama, Japan.

Kaneko, M. & Kunisato, Y. (2016). Developing a behavioral task to measure procrastination using the delay-discounting paradigm. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, July 28, Yokohama, Japan.

Sakamoto, J., Somatori, K., & Kunisato, Y. (2016). Bayesian linear model for partial missing experience sampling method data: pain variability in healthy university students. Poster session presented at the 31st International Congress of Psychology, July 29, Yokohama, Japan.

小田島裕佳・下斗米淳・国里愛彦 (2016). 社交不安傾向と低空間周波数画像に対する回避傾向との関連 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月9日

金子美帆・国里愛彦 (2016). 価値割引パラダイムを用いた先延ばしの測定—回避・衝動性の観点から— 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月9日

菊池羽音・村松 励・国里愛彦 (2016). 原因帰属スタイルに着目した ADHD 児の二次障害予防の検討—行動の統制感、抑うつ、ADHD スクリーニング尺度を用いて— 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月9日

坂本次郎・柚取恵太・国里愛彦 (2016). 日常場面における痛みと痛みの変動性が抑うつおよび破局的試行に与える影響—集中縦断データと線形ベイズモデルを用いた検討— 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月9日

柚取恵太・下斗米淳・国里愛彦 (2016). 命題アプローチにおける恐怖条件づけの学習過程—Rescorla-Wagner モデルを用いた推定— 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳

島 2016年10月9日

土谷美月・国里愛彦 (2016). スチューデント・アパシーと認知コントロールの関連—代替情動ストループを用いて— 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月9日

横光健吾・田山 淳・高田琢弘・甲田宗良・金澤潤一郎・国里愛彦・高橋高人・高橋 史・古川洋和・松岡紘史 (2016) 大学生における病的ギャンブル症状の潜在構造: taxometric analysis を用いて 第51回日本アルコール・アディクション医学会学術総会プログラム・講演抄録集, 179頁, 10月, 船堀.

国里愛彦 (2016). 臨床心理学研究におけるサンプルサイズ設計 日本パーソナリティ心理学会 アフター・カンファレンス企画 (共催: 日本社会心理学会)「統計セミナー 心理学研究におけるサンプルサイズ」 兵庫 関西学院大学西宮ケ原キャンパス 2016年9月16日

国里愛彦 (2016). 自主企画シンポジウム「連合学習理論の展開と臨床との接点」 企画・司会 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月10日

国里愛彦 (2016). 計算主義者からみた認知行動療法 大会企画シンポジウム「認知行動療法における神経科学的知見の応用可能性」 日本認知・行動療法学会第42回大会 徳島 アスティとくしま 2016年10月9日

日本認知・行動療法学会 編集委員, 企画委員

日本認知・行動療法学会第43回大会 プログラム委員

村松研究室 (非行・犯罪心理学)

研究室では主に、非行・犯罪心理学、非行臨床を研究しております。平成28年度は大学院生 (修士課程3名, 学部学生114名) が所属しており、少年犯罪のみならず、青年期や家族の問題など幅広く研究しております。非行臨床に関する研究成果は、矯正研修所 (法務省), 法務総合研究所, 児童相談所 (千葉市・横浜市), 少年サポートセンター (千葉県警), 少年相談担当者技術研修会 (神奈川県警), 家庭裁判所調査官研究協議会, 千葉家庭裁判所などにおいて研修, スーパービジョンという形式で発表しております。少しでも人の役に立つ心理学の構築を目標に、心理臨床の実務家に対してより高度な非行臨床の技術を提供することを目指しております。また、非行臨床の分野における優れた臨床家の育成も研究室の重要な役割の一つであり、家庭裁判所調査官, 法務教官, 保護観察官などを目指す学生が学んでおります。

諸活動

村松励 (2016). 非行・犯罪. 金城辰夫監修 図説 現代心理学入門 培風館 pp.65-67. 村松励 (2016). 犯罪心理学とは. 犯罪心理学事典. 丸善 日本学生相談学会第34回大会 (2016). ワークショップ「大学生の反社会的問題行動の理解と対応」講師

日本犯罪学会評議員 (平成26年10月～)

日本犯罪心理学会理事 (平成27年9月～)

科学警察研究所顧問（平成28年4月～）

中沢研究室（知覚心理学）

この研究室では、外界からの感覚・知覚的情報を心がどのように処理しているのかについて、またその結果として生じる知覚像がどのような性質をもっているのかについてを調べる研究を行っています。これまでの学生さんによる研究は、「感じられる時間の歪み」「文字の読みやすさの要因」「フォントによる語の印象への影響」「言語の情動価と記憶」「偶発学習と記憶」「motion induced blindness（運動する刺激によって周辺視野の静止刺激が知覚されなくなる現象）」「視覚情報による嗅覚情報への干渉」「音楽の印象をつくる要因」などのテーマでなされてきました。

28年3月に5名の卒業生、1名の修士修了生を輩出し、今年度は4年次7名、3年次3名という構成でした。平成28年度の学生メンバーの研究のテーマは、単純接触効果、視覚探索、BGM文脈異存効果、凶器注目効果、ワーキングメモリなど多岐にわたっています。夏のゼミ合宿は、秩父の合宿施設で、それぞれの研究のテーマを持ち寄って侃々諤々の熱い討論を深夜に及ぶまで行いました。もちろん味覚と嗅覚の実（体）験も交えながら。さらには、言語論理だけではなく感覚知覚を研ぎ澄まして人間に関する情報取得を図ったりもしています。

岡村研究室（リハビリテーション心理学）

研究室で取り組んでいる研究の対象は、小児から成人までリハビリテーションの対象となる障害を抱える人々です。様々な障害に対して心理的な構造を明らかにして、どんなアプローチができるのかについて研究しています。研究室には大学院博士1名、修士2年1名修士1年2名、学部4年7名学部3年4名です。学部のゼミでは特に体験を重視して、様々な施設の見学やボランティア体験をできるだけたくさんできるように考えています。体験の中から本当に必要なこと、興味の持てることをテーマに研究をすることを願っています。今年度は、国際福祉機器展見学、川崎市北部リハビリテーションフェスタへのボランティア参加と様々な体験ができたことを嬉しく思っています。

私自身の専門は、臨床神経心理学で、なかでも脳損傷に起因する高次脳機能障害者に対する神経心理学的アセスメント、認知リハビリテーションが研究対象です。遂行機能障害の評価や高次脳機能障害のグループ訓練の効果測定などが現在継続中の研究です。

合わせて、2011年度より専修大学心理教育相談室において、高次脳機能障害者の心理相談及び認知訓練教室を実施しています。臨床活動にもこれから研究室全体で取り組んでいきたいと思っています。

諸活動

岡村陽子（2016）イギリスの臨床神経心理士制度。専修人間科学論集。6, 1-7.

Yoko, O., Keita, A., Ami, S., & Ashok, J. (2016) Valida-

tion in Japanese of the Jansari assessment of Executive Functions (JEF©). 2016 midyear meeting, International Neuropsychological Society.

2016年度 NPO 法人神奈川メンタルヘルスサポート協会
こころと脳の臨床研究会 講師

神奈川県臨床心理士会理事会監事

岡田研究室（心理統計学）

私たちの研究室では、心理統計学の研究を行っています。心理学の各領域の研究では、様々なデータを扱います。たしかに知見を得るためには、データに基づいて議論をすることが不可欠だからです。その素材、すなわちデータをどのように料理して、価値や意味のある「美味しい」情報をとり出すことをできるのか、という問題を扱うのが心理統計学です。

この1年間では、学部4年の池田孝恒さんが第5回スポーツデータ解析コンペティションに参加し、発表審査会において「マルチレベルを用いた打率予測モデルの構築」と題したポスター発表を行いました。修士2年田中利夫さん・修士1年北條大樹さんは、国里研究の大学院生と経堂で、野村総合研究所が主催するマーケティング分析コンテスト2016に研究成果に参加しました。また、日本行動計量学会、日本計算機統計学会、Society for Mathematical Psychologyの各学会大会において大学院生が研究発表を行いました。修士1年北條大樹さんは、日本テスト学会からSociety for Mathematical Psychologyでの発表にあたり日本テスト学会から、池田・柳井スカラシップの研究発表助成を得ました。また、日本計算機統計学会第30回シンポジウムでの口頭研究発表「反応傾向バイアスに対処するための新たな係留寸描法データ分析モデル」で学生研究発表賞を受賞しました。学生たちの活躍を嬉しく、頼もしく思います。

また、本年度も夏季休暇中には東京工業大学の心理統計学研究室と合同で合宿を行いました。本研究室の学生たちも、東工大の心理統計学を専門にしている大学院生との研究の話や交流を楽しんでいたようです。また、学部の研究法では統計学によって立つ柱とし、心理学をフィールドとして、これからもさらに実践的な研究に取り組んでいきたいと思っています。

諸活動

Okada, K. & Hoshino, T. (2016). Researchers' choice of the number and range of levels in experiments affects the resultant variance-accounted-for effect size. *Psychonomic Bulletin & Review*. Online early view. doi: 10.3758/s13423-016-1128-0

Okada, K. (2016). Negative estimate of variance-accounted-for effect size: How often it is obtained, and what happens if it is treated as zero. *Behavior Research Methods*. Online early view. doi: 10.3758/s13428-016-0760-y

Okada, K. & Lee, M. D. (2016). A Bayesian approach to modeling group and individual differences in multidimensional scaling. *Journal of Mathematical Psychology*, 70, 35-

44.

Kusumi, T., Yama, H., Okada, K., Kikuchi, A., & Hoshino, T. (2016). A national survey of psychology education programs and their content in Japan. *Japanese Psychological Research*, 58, 4-18.

Okada, K. (2015). Bayesian meta-analysis of Cronbach's coefficient alpha to evaluate informative hypotheses. *Research Synthesis Methods*, 6, 333-46.

岡田謙介・加藤淳子 (2016). 政治学における空間分析と認知空間：個人差・集団差を考慮した多次元尺度法の展開と実証分析. 行動計量学, 43, 155-166.

小林哲郎・岡田謙介 (2016). 特集「計量政治学と行動計量学の接点」にあたって. 行動計量学 43, 111-112.

岡田謙介 (2016). ベイズ推定による情報仮説の評価：その理論と各種モデルへの応用について. 専修人間科学論集心理学篇, 6, 9-17.

岡田謙介 (2016). ベイズ統計学による心理学研究のすゝめ. サイナビ!ブックレット vol.8. ちとせプレス.

高井啓二・星野崇宏・野間久史 (著) 星野崇宏・岡田謙介 (編) (2016). 欠測データの統計科学. 岩波書店.

Okada, K., Lee, M. D, and Vandekerckhove, J. (2016). Modeling number of answered items in Large-scale online surveys. *Abstract Booklet of the 49th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology*, 42-43.

Tanaka, T., Okubo, M., Kunisato, Y., and Okada, K. (2016). A hierarchical diffusion model account of the gaze cueing paradigm. *Abstract Booklet of the 49th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology*, 63.

Hojo, D. and Okada, K. (2016). Bayesian multidimensional item response models for measuring response styles using anchoring vignettes. *Abstract Booklet of the 49th Annual Meeting of the Society for Mathematical Psychology*, 65.

岡田謙介 (2016). 心理学・行動科学におけるベジアンモデリング. 日本行動計量学会第44回大会 チュートリアルセミナー (札幌学院大学)

北條大樹・岡田謙介 (2016). 反応傾向バイアスに対処するための新たな係留寸描法データ分析モデル. 日本計算機統計学会第30回シンポジウム講演論文集, 11-14.

岡田謙介・星野崇宏 (2016). 実験条件を増やすと効果量は小さくなる—「効果量ハッキング」の危険性とその対処法について—. 日本教育心理学会第58回総会発表論文集, 564.

北條大樹・岡田謙介 (2016). 係留寸描法データのベイズ多次元 IRT モデル. 日本行動計量学会第44回大会発表論文抄録集, CA1-10.

高橋雄介・岡田謙介 (2016). 調査データの回答バイアスの補正方法としての係留寸描法の有効性. 2016年度人工知能学会全国大会論文集, 3 B3-NFC-05a-2.

Editorial Board (Associate Editor), *Behaviormetrika*
Editorial Board, *Japanese Psychological Research*

Program Committee, International Congress of Psychology (ICP) 2016

日本行動計量学会 理事, 運営委員, 和文誌副編集委員長

日本計算機統計学会 評議員, 欧文誌編集委員

日本教育心理学会 城戸奨励賞選考委員

日本心理学会 研究教育委員, 編集委員

日本テスト学会 編集出版委員

日本応用統計学会 編集委員

法務省府中刑務所 効果検証班 アドバイザー

法務省東京府中刑務所 効果検証班 アドバイザー

大久保研究室 (認知心理学)

私たちの研究室では, 心の情報処理を研究しています。平成28年度の人員構成は, 教員1名, 客員研究員1名, 博士研究員2名, 大学院生2名 (博士課程2名), 学部学生10名でした。今年度の4月から, 日本学術振興会特別研究員 (RPD) として, 川崎弥生さんが研究室のメンバーとして加わりました。そのような刺激もあり, 博士研究員, 大学院生は積極的に研究に励み, 学会で成果を発表し, 論文を公刊するなど意欲的に取り組みました。学部学生は自分自身の卒業論文の完成に向けて研究に勤しみました。卒業論文の進行はこれまでなかったくらいに順調でした。当人たちの努力とチームワークの賜物でしょう。満足な結果が得られた人もそうでない人もいたようですが, すべて良い経験なと思います。

今年度も, 2週間と短い間ですが, 7月にノルウェーのオスロ大学から Bruno Laeng 教授を客員研究員として迎えることができました。また, 同じく7月にはオーストラリアのフリンダース大学から Mike Nicholls 教授を迎え, 講演会を行いました。残念ながら時間に限りがありましたが, 世界的な研究者とふれあう機会を作ることができました。大学院生にとっては, 英語力が向上するなどとても良い機会となったと思います。

研究・学業だけでなく, 研究室としての余暇行事も充実していました。今年のゼミ合宿では昨年に引き続き伊豆赤沢温泉を訪れ, しっかり温泉につかりました。天気は良くなかったですが, 海で遊び, 夜にはバーベキューを認知研究室一同で楽しみました。今年度はご飯に合うおかずを持ち寄る「白米コンパ」, 熱々のおでんを突く「おでんの会」, そして恒例の「屋形船の会」など合宿以外の行事でも親睦を深めることができ, 楽しい1年が過ごせました。

研究活動

大久保街重 (2016). 帰無仮説検定と再現可能性. 心理学評論, 39, 57-67.

Ishikawa, K. & Okubo, M. (2016). Overestimation of the subjective experience of time in social anxiety: Effects of facial expression, gaze direction and time course. *Frontiers in Psychology*, 7, 611.

大久保街重 (2016). 記憶・言語・思考. 金城辰夫 (監) 図説 現代心理学入門 四訂版. 培風館

鈴木玄・大久保街重 (2016). 知覚的負荷は意味プライミングを変化させる：注意の瞬きを用いた検討. 専修大学人間

科学論集：心理学篇，6，25-30.

Okubo, M., Ishikawa, Kobayashi, A., & Suzuki, H. (2015). Cheaters used the left hemiface to increase facial trustworthiness. The 56th annual meeting of Psychonomic Society, Hilton Chicago, Chicago, Illinois, USA.

Ishikawa, K. & Okubo, M. (2015). Gender differences for emotional expressions in social anxiety. The 56th annual meeting of Psychonomic Society, Hilton Chicago, Chicago, Illinois, USA.

Laeng, B., Gitiye-Kiambarua, K., Bochynska, A., Suzuki, H. & Okubo, M. (2016). The response of eye pupils to isoluminant faces of three different ethnicities. The 31st international Congress of Psychology, Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan.

Ishikawa, K. & Okubo, M. (2016). Gender difference of social anxiety: hemifacial asymmetry for emotional expressions. The 31st international Congress of Psychology, Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan.

Suzuki, H. & Okubo, M. (2016). The role of arousal in the change detection of gaze direction. The 31st international Congress of Psychology, Pacifico Yokohama, Yokohama, Japan.

Tanaka, T., Okubo, M., Kunisato, Y., & Okada, K. (2016). A hierarchical diffusion model account of the gaze cueing paradigm. The 49th annual meeting of the Society of Mathematical Psychology, New Brunswick, New Jersey.

鈴木玄・大久保街亜 (2016). 男と女で視線検出は違う. 日本基礎心理学会第34回大会, 大阪樟蔭女子大学.

大久保街亜・石川健太 (2016). 信頼を得る顔とポーズ：裏切り者と協調者の比較. 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎 (HCS) 研究会・ヒューマン情報処理 (HIP) 研究会2015年5月研究会, 沖縄産業支援センター.

長田研究室 (障害児心理学, 児童思春期メンタルヘルス)

教員1名, 大学院生4名, 学部生10名で構成されています。ゼミ生は, それぞれ独自のテーマで研究を進め, 臨床実習を行うほか, 学会への参加 (ポスター発表, ワークショップ参加など) を活発に行っています。

本研究室のチーフの研究課題は「CU特性と神経発達症の関連および反社会的行動の予防」「神経発達症 (発達障害) を有する児童の親のメンタルヘルス」「インターネットの問題的/病的使用 (Problematic/Pathological Internet Use) に関わる研究」「神経発達症に関するメンタルヘルスリテラシー向上のためのポリシーの検討」です。

研究の他, 自閉スペクトラム症, 注意欠如多動症, 限局性学習症をはじめとする神経発達症の乳幼児・児童思春期の療育およびカウンセリングの実践と親のコンサルテーション, 教育現場の教師への神経発達症および不適応行動を呈する児童への対応に関するコンサルテーションを定期的に行っています。

共同研究として, 精神疾患を有する親を持つ子どものメン

タルヘルスの問題の発症の予防という大きな取り組みを行っています。研究代表者と共に, フィンランドの児童精神科医である Dr. Solantaus が開発・実践している 'Let's talk about children' という取り組みを翻訳, わが国初の実践, 研究をすすめています。その一環として, 研究代表者が出版した翻訳本の翻訳協力を行いました。

今年度は, 1泊2日でゼミ合宿を箱根で行ってまいりました。とてもタイトなスケジュールで大変でしたが, 学生は活発な討論と朝まで Talk で盛り上がっていたようです。

諸活動

Osada, H., Yamaomto, S., & Ueno, R. (2016). Usability of the Japanese version of callous-unemotional traits as a screening tool for children with neurodevelopmental disorder. Fifth International Conference on Families and Children with Parental Mental Health Challenges, Basel, Switzerland.

平成26～28年度科学研究費助成事業 (学術研究助成金 (基盤研究C)「小中学生におけるネット依存, 発達障害, およびCU特性の関連に関する研究」) 研究代表者

長田洋和 (2016). 発達障害のアセスメントと支援～ライフステージに応じた支援とは～麻生区研修会, 麻生区役所, 川崎市.

江戸川区教育委員会 特別支援教育専門家チーム (心理臨床)

長田洋和 (2016). 対応が難しい児童に対する対応について. 江戸川区教育委員会研修会, 江戸川区立臨海小学校, 江戸川区, 東京.

日本乳幼児医学・心理学会 評議員, 編集委員

日本発達障害学会 評議員

日本心理学会, 日本心理臨床学会, 日本児童青年精神医学会, 日本発達心理学会会員

澤研究室 (学習心理学)

私たちの研究室では, 主にヒトや動物が経験によって行動を変えていく学習という現象について研究しています。2016年は, 教員1名, 研究員2名, 大学院生2名 (博士課程2名), 学部生11名という構成でした。昨年度までの研究を踏まえて, 今年度もマウスを用いた抑うつ動物モデルの妥当性, 人間の社交不安の獲得と再発といった臨床的应用に関わる研究, 人間とウマの種を越えたコミュニケーションやインタラクティブに関する比較認知科学的研究を進めています。他大学や企業との共同研究を積極的に推し進め, 行動観察ソフトや力学的解析, バイオモデリングなど新しい手法を導入しています。

諸活動

論文・プロシーディング

Takahashi, A., Nishiyama, K., Ohkita, M., & Sawa, K. (in press). Failure to find reinforcement effect of neck patting in horses (*Equus caballus*). *Psychologia*.

澤幸祐・栗原彬（2016）. 動物心理学における再現可能性の問題. 心理学評論, 59, 46-56.

鮫島和行・大北碧・西山慶太・瀧本彩加・神代真里・村井千寿子・澤幸祐（2016）人-動物間における社会的シグナル. 人工知能（人工知能学会）, 31, 27-34.

小窪久美子・田中恒彦・岩佐和典・澤幸祐・角谷寛・小森政嗣（2016）. 選択的セロトニン再取り込み阻害薬服用履歴が日内活動量パターンに及ぼす影響の予備的検討. 信学技報（電子情報通信学会）, 116, 29-34.

大北碧・高橋良幸・澤幸祐（2016）じゃんけん課題における同調的な行動は個人空間距離を縮めるのか？ 信学技報（電子情報通信学会）, 116, 45-50.

学会発表・シンポジウム

大北碧・高橋良幸・澤幸祐. じゃんけん課題における同調的な行動は個人空間距離を縮めるのか？ 電子情報通信学会（ヒューマンコミュニケーション基礎研究会）, HCS2016-9, 沖縄産業支援センター, 2016年5月.

Nishiyama, K., Ohkita, M., Samejima, K., Sawa, K. Interaction between human voice and horse gait transitions in longeing training. Poster presented at *12th International Society for Equitation Science Conference*, Saumur, France, June 2016.

Takahashi, Y., Ohkita, M., & Sawa, K. Conformity and synchronization in “rock-paper-scissors” tends to reduce interpersonal space. Poster presented at *the 31th International Congress of Psychology*, PACIFICO Yokohama, Yokohama, Japan, July 2016.

蔵屋鉄平・澤幸祐. うつ病モデルマウスの活動性概日リズムの検討—ベイズ統計モデリングによる2群の差の比較—. 日本認知・行動療法学会第42回大会, アスティとくしま, 2016年10月

Ohkita, M., Nagasawa, M., Mogi, K., & Kikusui T. The positive reinforcement of owner's gaze to dogs. Poster presented at *76th Annual meeting of the Japanese Society for Animal Psychology*, Hokkaido University Conference Hall, Sapporo, Japan, November 2016.

他4件

高田研究室（深層心理学）

院生4名, 学部学生12名のゼミとなりました。今年は夏合宿の日にちょうど台風に見舞われてしまい, 残念でしたが中止としました。

また例年にならい, 8月～10月の間に修士1年生4名が, 大妻女子大学院, お茶の水女子大学院との合同で, 施行カウンセリングに参加いたしました。他大学の院生とカウンセラー役, クライアント役をそれぞれ交換して行うものです。そして各大学院の教員がスーパーヴィジョンを毎回します。ケース担当を間近に控えて, よい練習になるのと, 他大の相談室の雰囲気を知ることができるのも魅力のようです。

諸活動

・平塚市子ども教育相談センター 事例研究講師

・高田夏子（2016）ユング研究所に留学して—ゲニウス・ロキに会うこと—

多文化間精神医学会第回大会シンポジウム（於：宇都宮）

・高田夏子（2016）発達のアセスメント 子育て支援と心理臨床 vol.12 福村出版 pp6-15

・日本箱庭療法第30回大会 研究発表司会（於：帝塚山学院大学）

・高田夏子（2016）トラウマのサバイバーとしてのニキ・ド・サンファル

専修大学人文科学研究所月報第283号 pp19-38

下斗米研究室（社会心理学）

下斗米研では, 伝統的に, 人の社会的環境への適応過程を研究しています。平成28年度の室員構成は, 教員1名, 大学院修士1名, 学部生13名（4年7名, 3年6名）でした。今年度も, （1）理性的で快適な人間関係や集団の形成条件を見いだすこと, （2）対人関係や集団成員の苦悩防止と自己発達・成長方策の探索, （3）差別や排斥, 葛藤や紛争なく, 集団や個人らしさを大切にされた協調的社会を構築するための必要条件を見いだすこと, という3つの研究室伝統テーマのもと, 調査や実験による研究活動が積極的に進められました。大学院生は, 学校心理学会と教育心理学会にて発表する一方で, 学校教員への面接調査を集団力学の視点から精力的に行いました。今年度の3年生は, 実学的側面を重視した問題意識を有していた分, 実証ベースに載せていく上で, 理論的枠組みとリサーチ・クエッションの設定, そして研究コンセプトの展開にじっくり1年間かけました。苦労があったことと思いますが, 意義深い研究の方向性を見出しつつあると言えます。4年生は, 3年次のデータからさらに新たにデータセットを作り議論を深めたり, 自身の理論的枠組みに沿って研究の一層の精緻化が図られるなど, 非常に示唆深いデータのもと意義のある研究に仕上げることができました。二人三脚のように教員と取り組んできたこと, また室員同士が合評会を中心に議論を深め, 互いを高め合ってきたことに, なお一層頼もしくまたうれしい時間でした。研究成果の一端は, Social Psychology Bulletin of Shimotomai Laboratory, Vol. 6, March, 2016において公刊されています。新歓コンパ, 軽井沢での夏合宿やピザ・パーティ, 追いコン, そしてエンドレスの合評会などは今年も顕在でした。下斗米研の室員は, 毎年互いにサポーターですが, 今年は特にアット・ホームの雰囲気でした。

諸活動

著作

下斗米淳（2016）. 社会的排除としてのいじめの類型化—社会的欲求の阻害と社会的痛みの理解. 日本教育心理学会第58回総会

下斗米淳（2016）. 関係構築と場のコントロール機能に関する実証研究報告. 日本たばこ産業株式会社研究報告書.

小田島裕佳・下斗米淳・国里愛彦 (2016). 社交不安傾向と低空間周波数画像に対する回避傾向との関連, 日本認知・行動療法学会第42回大会

社会活動

労働安全衛生総合研究所研究倫理委員

日本学術振興会専門委員

最高裁判所委員

山上研究室 (発達心理学, 比較・発達認知)

平成28年3月15日に, 総ページ数95ページの専修大学山上研究室年報 Annals of Yamagami Laboratory Vol.6 を刊行しました。第6巻は, 卒業論文3編と, 3年生のプレ卒業論文3編そして実習助手の榎本玲子さんの論文「身体近傍空間の変容に道具の使用方向が与える影響についての研究」および山上による巻頭言「「心理測定」から「基礎実験2」へ(3)」が掲載されました。

引き続き, 研究法1, 2の授業において, 授業日前日の0時まで, 発表者は発表用資料を TeX で作成し, それをPDF化してアップロードすることを求めています。また発表担当以外のメンバーは, 授業までに必ず発表資料に目を通すことをルール化しました。

なお, 学生が山上にアクセスする際の利便性向上のために, 山上の所在をインターネットから確認可能な「ウェブ存在表示システム」を継続して運用しています。

諸活動

山上精次 (2016). 心理測定から基礎実験2へ(3) Annals of Yamagami Laboratory, vol.6, 1-9.

石黒良和, 榎本玲子, 山上精次, 藤岡新治 (2016). 援助要請と生活適応感の関連性: 自尊感情と他者軽視の観点から 専修人間科学論集, vol.6, 31-40.

堀越 歩, 榎本玲子, 山上精次, 吉田弘道 (2016). キーボードタッピングが侵入記憶に及ぼす影響 専修人間科学論集 vol.6, 59-91.

林大輔・大西まどか・山上精次 (2016). デジタル数字のクラウドニング効果における局所性と全体性 視覚覚学会, 2p12.

大西まどか・小田浩一・山上精次 (2016). 文字の線幅と輝度極性が日本語文の可読性に与える影響 日本基礎心理学会第35回大会

榎本玲子・山上精次 (2016). 道具の身体化が身体近傍空間に与える影響についての検討 基礎心理学会第35回大会, 1PM47.

大西まどか・小田浩一・山上精次 (2016). 読材料の文字数がMNREAD-J読書評価に与える影響, 視覚障害リハビリテーション協会

Koichi Oda, Madoka Ohnishi, Terumi Otsukuni, Aoi Takahashi, Michiko Sugiyama, Seiji Yamagami (2016). Effects of length of reading materials on key parameters of reading speed function, VSS 2016 0509.

社会的活動

学校法人専修大学 評議員, 理事

社団法人日本心理学会 代議員

日本基礎心理学会 理事

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構 文学・神学専門委員会心理学部会委員

吉田研究室 (発達臨床心理学)

28年度の構成メンバーは, 大学院1年生2名, 2年生1名, 学部5年生1名, 4年生6名, 3年生6名です。大学院2年生は, 修論研究を進めています。研究テーマのキーワードは, 誇大型自己愛, 過敏型自己愛, 友人関係, 被養育体験です。4年生は, 卒論研究を進めています。研究テーマのキーワードは, 抑うつ, 自己愛, 異性関係, パーソナルスペース, 理想自己への志向性, 結婚観などさまざまです。3年生もほぼ研究テーマが決まってきており, プレ卒研究のまとめに向けて, 分析を進めているところです。よい研究がまとまることを期待しております。学部ゼミの夏休みの合宿は箱根セミナーハウスを使って9月14, 15, 16日の2泊3日の日程で行われました。それぞれが卒論研究をテーマに発表し, 討論をしました。リクリエーションは, キャンプ場でのバーベキューを楽しみました。余興でスイカ割もしました。セミナーの管理人の方が, 「こんなに晴れたのは久しぶりだ」とおっしゃっていました。ゼミ生の日ごろの行いがよかったためではないかと思っています。

諸活動

- ・吉田弘道, 青年期, 成人期, 長田久雄編 看護学生のための心理学, 第2版, 78-85, 86-92, 医学書院, 2016, 1, 6
- ・堀越歩, 榎本玲子, 山上精次, 吉田弘道, キーボードタッピングが侵入記憶に及ぼす影響, 専修人間科学論集, 心理学篇, 6, 1, 59-71, 2016, 3 専修大学人間科学学会
- ・滝口俊子, 青木紀久代, 亀口憲治, 菅野信夫, 高橋幸市, 馬場禮子, 繁多進, 深津千賀子, 吉田弘道企画, 臨床心理士子育て支援合同委員会主催 シンポジウム「子育て支援と臨床心理士: 保育現場との出会い」, シンポジスト: 上村初美, 宮本雅彦, 増田高, 指定討論: 植木田潤, 繁多進, 吉田弘道, 日本心理臨床学会 第35回秋季大会, 2016, 9, 4, 横浜
- ・吉田弘道, 書評, キャシー・アーウィン, ジャニーン・スターンバーク編著 鶴飼奈津子監訳「乳幼児観察と調査・研究」(創元社, 2015) 精神療法, 42, 1, 112-113, 2016, 2, 5
- ・吉田弘道, 指定討論, 鈴木はるみ, 繁多進, 三上謙一, 青木紀久代, 馬場禮子, 菅野信夫, 深津千賀子, 柏女霊峰, 亀口憲治, 第12回子育て支援講座「子育てにおけるコミュニケーション」, 臨床心理士子育て支援合同委員会開催, 2016, 7, 10, 京都

社会的活動

日本小児精神神経学会代議員

日本小児保健協会 小児科・小児歯科保健検討委員会委員
 日本臨床心理士資格認定協会・日本心理臨床学会・日本臨床心理会による臨床心理士子育て支援合同委員会委員
 日本臨床心理士会 保育臨床専門部会委員
 川崎市子ども・子育て会議委員
 公益財団法人 成長科学協会 心の発達研究委員

Ⅲ. 卒業論文題目

亀井 里佳 青年の自己愛的傾向と異性関係および、母親の養育態度との関連
 大森 淳 コンピュータゲームの没入度が恐怖学習に与える影響
 山本 由佳 対人場面における認知的方略の違いと抑うつとの関連
 佐藤奈津美 内・外集団の対極性によるプロトタイプと自己イメージがステレオタイプの生起に及ぼす効果：作り出される関西・関東人イメージとは
 北畠亜矢子 顔文字の情報処理過程に関する生理心理学的研究 ―事象関連電位を用いて―
 安生 千紗 非行の生起に影響を及ぼす環境要因および人格特性
 田丸沙也香 電車内迷惑行為と個人差要因との関連性
 井上 遥 表情と背景色の関係による閾下単純接触効果への影響の検討
 今坂 七海 絵本を用いた健常者に対する高次脳機能障害者への態度変容について
 椎名 亮介 自己の意識と行動が精神的健康に与える影響について
 天野 啓太 青年期における抑うつと遂行機能の関連
 松橋 萌子 食べ物画像における意味的プライミング効果およびそれに対する空腹感の影響について
 上原 瑠美 チアリーダー効果の生起におよぼす刺激の類似性の影響
 村越 祐也 行動活性化、パーソナリティ特性、抑うつとの関連について ―行動活性化の抑うつ低減効果にパーソナリティ特性が及ぼす影響―
 原 隆章 漢字の読み間違いに関する生理心理学的研究 ―漢字錯合現象を用いて―
 杉本きらら テスト効果の効果サイズ ―検索経路と検索努力の強化を用いて―
 冠木 貴明 道徳ジレンマ課題の思考時間制限が倫理的判断に与える影響の実験的検討
 門田 綾奈 パーソナリティ傾向が演技パフォーマンスに及ぼす影響について
 渡邊和都美 交友関係の質の違いに対する親の養育態度および家族環境の関連性
 渡邊ひさら 音楽のテンポが生理指標及び心理指標に与える影響についての検討
 澤田 唯 恐怖感情が凶器の検出に及ぼす影響
 廣田 真衣 不安と家族関係の関連 ―家族イメージ法を用いての検討―

杉本 裕樹 触覚刺激を用いた見本合わせ課題におけるラットの刺激等価性の検討
 根岸 真里 連続殺人における犯行形態と加害者属性のプロファイリング
 佐藤 史織 防犯意識を規定する諸要因の検討
 大下 佳奈 自己愛及び自尊感情とリスク傾向との関連について
 谷口 美樹 親子関係とストレス・コーピングが抑うつに及ぼす影響
 武井奈緒美 アタッチメントとパーソナルスペースとの関連性について
 星野 由美 Saint-Exupéry における永遠の少年性
 根本 楓 大学生のストレスコーピングの組み合わせと性格特性の関係についての検討
 菱田みさき 色の典型性効果が結合探索に与える影響
 山本 真生 カイコの条件性場所選好課題において飼育条件が及ぼす影響
 堀江 隆汰 共感性がラバーハンドイリュージョンに与える影響 ―多次元共感性尺度による検討―
 南 侑斗 友人関係および感情抑制と抑うつとの関連
 増田 真鈴 楽曲のジャンルと熟知感がBGM 文脈依存効果に及ぼす影響
 小山 貴士 視線による注意シフトに必要な手がかり提示時間と手がかりの操作による検討
 内村 春香 大学生におけるストーカー行為と人格特性・恋愛スタイルとの関連
 関 綾香 自己効力感・競技不安・心理技法が競技パフォーマンスに与える影響について ―フェンシング選手に関して―
 金子 瑤 悲しみ喚起場面における抑うつの時間的変化に対する反芻・省察の影響
 村上 璃佳 現実自己と理想自己の差異におけるパーソナリティ特徴に関する研究
 藤田 茅紘 視聴覚相互作用による視覚刺激過大視時の事象関連電位に関する研究
 須藤亜友美 視線と魅力が単純接触効果に及ぼす影響
 池田 孝恒 LBA モデルを用いた多肢選択課題における反応時間のデータ分析
 平野 桃香 ダークトライアド傾向が感情刺激の記憶に及ぼす効果
 石田佳奈子 Tove Jansson の病跡学
 谷口カンナ かわいい感情に影響を及ぼす認知的共感性
 添田麻紗子 伝統的・ネットいじめ加害経験および被害経験に関連する要因の検討 ―自尊心と被受容感のバランス・性別・加害と被害の関係の観点から―
 山本 藍子 Andersen の病跡学 ―作品の魅力―
 福島 葉摘 パーソナリティ障害特性とネガティブ・ライフイベント及び共感性の関連について
 清水 麻紀 大学生の吃音症傾向と社交不安症傾向の関連の検討
 荒井 遼河 完全主義が誘発する抑うつ傾向へのストレス

マインドセットの調整効果の検討

田染 光希 ポジティブな気分が笑顔の魅力評価に与える影響 ～表情模倣を用いた検討～

酒巻 里奈 内集団実体性が人の基本的欲求の充足と適応性に及ぼす効果に関する検討：コミュニティ実体性の損失による傷つきの理解に向けて

永田 彩実 他者操作性に恋愛間葛藤帰属と自己愛が及ぼす影響

川上 朋海 映像法を用いた健常者の脊髄損傷者に対する態度変容についての検討

小笠原崇文 協力と裏切りがジレンマゲームにおける利得に及ぼす影響

青山 彩乃 自律－依存の均衡状態に応じた社会的適応の特徴的差異の検出：不適応とパーソナリティ障害生起の潜在的機序の探索

町田 稔貴 不気味の谷現象と倒立効果における事象関連電位 N170の検討

田中 結子 大学生アスリートにおける理想自己への志向性について

鶴岡 敦子 大学生の性役割観及び相互独立・相互協調的自己観と結婚観との関連

久万歩奈美 オノマトペを用いた連想リストで虚偽記憶は発生するのか 一成人と幼児を対象とした検討一

延藤 美幸 特性不安が音声や表情によって表出された感情の認知に及ぼす効果の検討

渡利 直人 親の養育行動とためこみ症の関連についての検討

金子 真子 性格特性語の閾下呈示と気分誘導とが人物印象形成に及ぼす影響

牛木 祥太 個人規範と集団規範の調整バイアスに関する探索的研究：日常の個人内・個人間適応を巡って

平賀信之介 集団帰属意識の希薄化過程の検討 一集団特性と社会的動機の阻害を基盤として一

増山 香子 家族内呼称と家族関係の関連について 一家族内でどのように呼びあっているかに着目して一

上田 花葉 出生順位による性格特性

植田 羽葉 示唆運動の知覚をひきおこす要素が視覚誘発電位に及ぼす影響について

太田 咲野 リーディングスパンテストにおける視覚的イメージ方略の効用

越智 宏朗 集団発達モデルの構築と汎用性の検討

秋山明日香 両親間の関係と問題対処方略に関する検討 一ひきこもり支援の観点から一

岡本 亮平 抑うつを伝染しやすい人の特徴について

一抑うつ伝染尺度の作成と対人依存・感情制御との関連の検討一

小橋 睦美 親子関係における反抗期の役割

石渡 建樹 制御焦点が自己評価に与える影響 一状態自尊心を用いた検討一

井口 聖香 シャーデンフロイデと共感性の関連 一潜在連合テストを用いての検討一

海老原功亮 水木しげるの病跡学

宮島 舜希 ネガティブライフイベントに対するレジリエンス・プロセスモデルの構築

吉田百合子 自尊感情とストレス認知・ストレスコーピングの関連について

佐藤 亜美 香り吸入が短期記憶に与える影響 一日本語版リーディングスパンテストを用いた検討一

松浦 大介 大学生の介護イメージ

花城 良枝 幸福感の生起モデルの構造の検討 一自己過程を理論的枠組みとして一

八木あかね キャラクター属性“ヤンデレ”に関する多面的研究

大瀧 夢乃 場面緘黙の治療と支援 ～個別事例研究20事例を参考にして～

出口愛結実 自閉症スペクトラム傾向を示す大学生のいじめられた体験とその後の影響

上田 直人 サイコパシー傾向者の罰行動に伴うコストに対する飲酒の習慣の影響について

佐々木 愛 評価の文脈によってセルフ・ハンディキャッピング方略は異なるか？

福岡 明寛 協力行動の程度が対人場面での信頼関係に及ぼす影響

下田 匠 ソーシャルサポートが与える抑うつへの影響 一5つのサポート源別の検討一

IV. 優秀卒業論文

HP25-0033J 堀江 隆汰（指導教員：山上精次）

HP25-0059A 青山 彩乃（指導教員：下斗米淳）

HP25-0063H 久万 歩奈美（指導教員：山上精次）

V. 修士論文題目

ML15-7001H 小野 茜 大学生における精神病様経験のコミュニティアセスメント日本語版（J-CAPE42）の有用性および早期精神病的症状のスクリーニングに関する調査（長田・大久保）

ML15-7002F 長井 拓実 日常の活動性とネガティブな気分・感情が反すうに与える影響について一EMA とアクチグラフを用いての検討一（高田・澤）

ML15-7003D 風間 大輝 共犯による非行において同調行動が規範意識、犯罪遂行性に与える影響の検討（村松・大久保）

ML15-7004B 伊藤 夏野 大学生を対象とした抑うつと情動に関する検討一主観的報告と客観的評価の違いの観点から一（岡村・澤）

ML15-7005A 田中 利夫 拡散モデルを用いた視線手がかり課題における情報処理過程のモデリング（岡田・大久保）

ML15-7006J 工藤 未来 青年期の対人関係のあり方を規定する諸要因の探索一過敏型自己愛、誇大型自己愛および両親との関係性におけるプロセスモデルの検討一（吉田・下斗米）

ML15-7007G 前山 愛実 日本の大学生における自閉スペクトラム症を有する人への知識が態度に及ぼす影響の検討
(長田・山上)

ML15-7009C 小田島 裕佳 社交不安傾向と空間周波数の低い表情画像に対する回避との関連 (国里・下斗米)

Ⅵ. 修士論文研究優秀ポスター発表

最優秀賞

ML15-7005A 田中 利夫 (主指導：岡田謙介, 副指導：大久保街聖)

優秀賞

ML15-7009C 小田島裕佳 (主指導：国里愛彦, 副指導：下斗米淳)

専修大学心理学研究室専任構成員の在職歴

[illegible]